

平成三十年 論語に学ぶ人間学セミナー 第七回

西はりまライオンズクラブ主催の論語セミナーが十年目に入っております。毎月同じ顔を拝見しながら、また、今回が初めてですと言われる方など、年齢を重ねても学ぼうという姿勢で取り組まれている市民の皆様のお熱い心が「国歌斉唱」や「論語の素読」で伝わってきます。

読書百遍 意 自から通ず といわれるように、繰り返し学ぶ中で意味が分かる時がやってきます。学校の先生としてだけではなく、若いころから人間学を学んでこられた三木先生の解説や事例などのお話で「そうだったのか！」と気づくことができればこれほど素晴らしいことはありません。

十二月まで毎月の講座ですが、いつからでも参加できますので、龍野商工会議所のホームページや本誌折込みチラシにて申し込みください。

■ 仮名論語 揚貨第十七

子曰わく、性相近きなり。習相遠きなり。

孔子先生が言われた。

人の生まれつきは大体同じようなものであるが、しつけによって大きくへだたるものだ。つまり、生まれたときは同じようなものでありながら、年齢を重ねるごとに学ぶ人と学ばない人は大きな差が出てくるということ。

子曰わく、巧言令色鮮なし仁。

孔子先生が言われた。

「ことさらに言葉を飾り、顔色をよくする者は、仁の心が乏しいものだよ。」つまり、口先の上手な人や顔色を窺うような姿勢の人には、思いやりの心が少ない、信用できないということ。この言葉は論語の中に何回も出てくる。大切なことを繰り返し教えてくださっている。

子曰わく、道に聴きて塗に説くは、徳をこれ棄つるなり。

孔子先生が言われた。

「道ばたでよいことを聞いて、さっそくその聞きかじりを途中で話すのは、徳を棄てるようなものだ。」このことを「道聴塗説」という。同じような意味で、荀子という書物には「口耳四寸の学」（耳と口の間は四寸ほどであることから）とある。

■ 大 学

一家 仁 ならば、一國 仁 に 興り、一家 讓 ならば、一國 讓 に 興る。一人 貪 戾 ならば、一國 乱 を 作す。其の 機 此の 如し。

その昔、小学校には必ずあった二宮金次郎の銅像。薪を背負って歩く少年が読んでいた本はこの「大学」である。そして、開いてあったページがここなのです。

伊與田覺先生の解説によると、

一家の中が互いに仁の心をもって和やかに睦み合えば、自ら仁の気風が国中に満ちるようになる。一家の中で互いに譲り合えば、自ずから国中に我を捨てて互いに譲り合う気風が興ってくる。しかし、君主が貪欲で道理を無視して我儘であると、国中がこぞって乱を起こすようになる。このように、治乱興亡のはずみは甚だ微妙なものである。

と、解説されております。

三木先生のご紹介で、そんな気付きをいただきながらの難しい中国古典が身近に感じられるようになってきました。

■「心豊かに老いを生きる」(三木 英一 著)

今回は「読書の楽しみ」として、三木先生がたくさん読まれた本の中から吉田松陰先生の名言を紹介していただきました。

人間として生きながら、古今の真実に通じることなく、
聖賢を師として学ばなければ、くだらぬ人間になってしまう。
だから、読書をして古人を友とするのは、
君子(立派な人)の大事なつとめである。

人間学セミナーは自身を磨く為の良い機会になると思います。皆様のご参加お待ちしております。
次回 平成三十年度 第八回は、十月十日(水)午後六時三十分からです。